

# 水ビジネスの展望～2026年の潮流と日本企業の進むべき道～



グローバルウォータージャパン代表  
(国連テクニカルアドバイザリー)

吉村 和就

はじめに

「足の速い世界水ビジネス」の主要成長分野は、「水資源サイクル」(データセンターの水冷化)、「海水淡化化」の3領域である。

国連の推計によれば、現在約80億人の世界人口は近い将来、100億人を突破しようとしている。グートレス国連事務総長は、地球上の約半数(4億人)が水ストレスに直面する警鐘を鳴らし、新たな水資源の確保と水リサイクルの加速は「國家の安全保障」に直結すると言ふ。この危機の解決策の要こそが、水ビジネスの進展である。

世界水ビジネスの主戦場は、上下水道の建設・老朽化対策・維持管理といった公共インフラ整備であり、市場全体の約7割を占める。しかし、この領域ではヴェオリアやスズキといった「水メジャー」、あるいは各国の元財閥企業が強固な基盤を持っており、日本企業の参入障壁は依然として高い。そこで本稿では、日本企業が強みを発揮しやすく、成長スピードの速い「足の速い世界水ビジネス」に焦点を当てる。

2026年における

各国・地域の下水処理水リサイクル率

国名	リサイクル率
イスラエル	約90% (世界最高)
スペイン	約10~15%
エジプト	約10~20%
シンガポール	約30~40%
米国	約4~8%
日本	約1.5~2%

各種資料から筆者作成

## 「水リサイクル」など3領域が成長分野

タセンターの水冷化、「海水淡化化」の3領域である。人口増加、地球温暖化による水不足、そして都市化の加速を背景に、これらの分野はアジア・中東を中心に二桁成長を維持する巨大市場となると予測されている。

・需要背景・経済協力

方など)の再生水を農業処理場(日量560万立

・業用水

・市場の主要トレンド

・需要背景・経済協力

方など)の再生水を農業灌

溉に活用する大規模プロジェクトがすでに始動している。

②データセンター・空冷から水冷への転換

生成AIの爆発的普及に伴い、データセンターの冷却需要が急増している。高性能半導体を搭載したサーバーラックは甚

大な熱を発するため、従来の空冷に代わり、コストで効率的な「水冷化」

が主流となった。30年には生成AI向け

だけ年間約66億立方メートル(約135

①ひつじの水冷化)が予測され

ておらず、これは日本の

・主要プレイヤー・東

レ、日東電工、東洋紡などの日本勢に加え、デュポン(米)、LGケミカル(韓)が、低圧・高効率な水処理膜の開発で激しいシェア争いを繰り広げている。

3. 国内水ビジネス

市場の主要トレンド

・需要背景・経済協力

方など)の再生水を農業灌

溉に活用する大規模プロ

ジェクトがすでに始動して

いる。

②データセンターの水冷

・市場予測・25年の約

190億ドルから、33年に

は約300億ドル(約4.

5兆5兆円)へ拡大。C

AGRは10~12%で推移

・地域別では中東・北

アフリカが最大で、北米

・技術動向・逆浸透(R

・主要プレイヤー・東

レ、日東電工、東洋紡などの日本勢に加え、デュ

ポン(米)、LGケミカル(韓)が、低圧・高効

率な水処理膜の開発で激

しいシェア争いを繰り広

げている。

・長期予測・年平均成

長率(CAGR)は12.

1%で推移し、35年には

1077億ドル(約16兆6

900億円)規模に達す

・中期予測・年平均成

長率(CAGR)は12.

1%で推移し、35年には

1077億ドル(約16兆6

900億円)